

新潟県内初発見の円筒埴輪

— 新潟市東区牡丹山^{ほたんやま}諏訪神社採集の埴輪片をめぐって —

橋本 博文*・小林 隆幸**・奥田 尚***

はじめに

平成24年8月5日に新潟市東区牡丹山3丁目の諏訪神社境内から埴輪片が採集され、当地が古墳である可能性が高まった(新潟日報社2013)。現地は信濃川河口から直線で約3.5km、新砂丘Ⅱの牡丹山砂丘上に立地する。かつて阿賀野川は通船川の流路を流れて信濃川と合流していたことから、信濃川と阿賀野川の2つの大河が日本海に流れ出る要地に位置していたことになる。同砂丘列には西方750mに古墳時代から江戸時代にいたる複合遺跡である山木戸遺跡(新潟市教育委員会2004)が位置する。

新潟県内では南魚沼市飯綱山古墳群10号墳の壺形埴輪(橋本1998)に次いで二例目の埴輪の発見となり、円筒埴輪では県内初となる。



写真1 牡丹山諏訪神社

*新潟大学人文学部教員

**新潟市歴史博物館学芸員

*** 榎原考古学研究所特別指導研究員

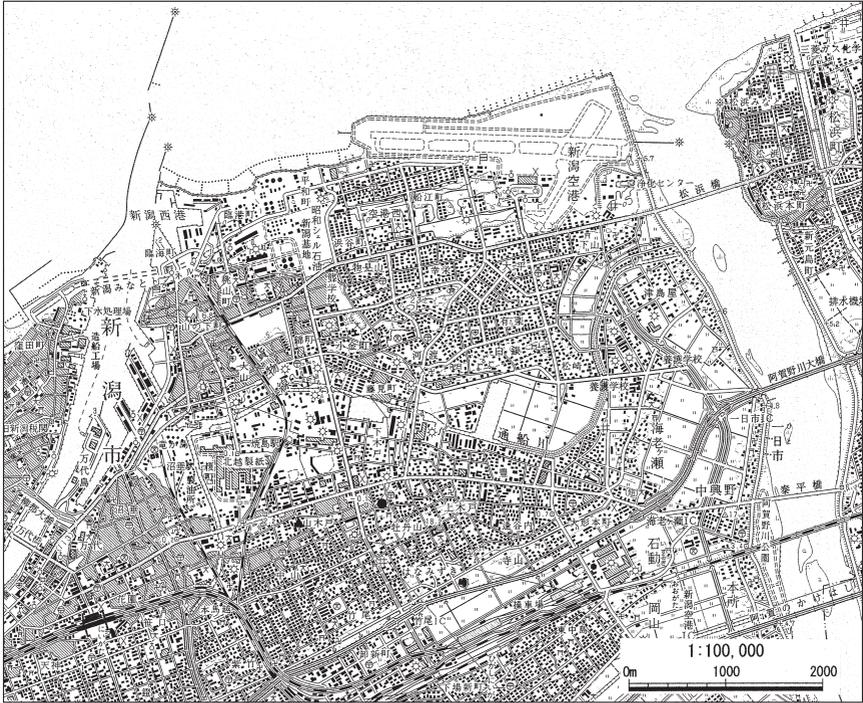


図1 牡丹山諏訪神社古墳(●印)と山木戸遺跡(▲印)の位置
〔国土地理院5万分の1の地形図「新潟」より〕

1. 埴輪の確認と古墳発見に至る経緯

2010年、民俗学者で郷土史研究者でもある金塚友之丞^{きんづかとものじょう}(註1)の所蔵資料が新潟市歴史博物館に寄贈された。その中に「牡丹山」と注記された円筒埴輪と思われる破片が含まれていた。確認できた埴輪片は5点で、埴輪特有の突帯(タガ)や透かし孔の痕跡が認められた。器面には刷毛目が施されていた。「牡丹山」を素直に解釈すれば、新潟市東区の牡丹山を示していると考えられる。埴輪片が収納されていた菓子箱にも、牡丹山のほか新潟市内の地名を示す「河渡^{こうど}」や「築上山^{つかけやま}」などの地名が記され、そこで採集されたと思われる遺物が納められていた。したがって「牡丹山」の注記もその一連の中で新潟市の牡丹

山を指していると考えられた。しかし、これまで新潟県内での円筒埴輪の発見は皆無であり、しかも埴輪が示す古墳時代中期の古墳は蒲原平野では発見されていないことから、新潟市の牡丹山と埴輪を俄かに結びつけることには抵抗があった。そして牡丹山に埴輪を伴う古墳があった可能性を示しながら、問題提起も兼ねて2012年12月に新潟市歴史博物館の企画展示室で展示紹介した。

展示の反応は市民からあった。東区在住で古代や考古学に興味を持つ本間誠氏は、埴輪と牡丹山との関連を独自に調べ、牡丹山の諏訪神社地が古墳の可能性が高いことを指摘した。氏は近世の絵図（註2）の牡丹山諏訪神社の位置と思われるところに山が描かれていること、また明治28年の公図に円形に区画された神社地が記載されていることから、この地を古墳と考えたのである（註3）。

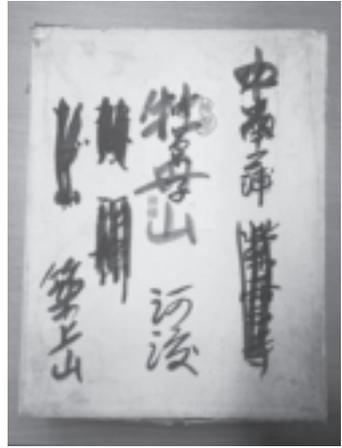


写真2 埴輪が収納されていた菓子箱



図2 明治28年の公図

一方、埴輪片を所蔵していた金塚友之丞が埴輪について記録した資料は見つかっていない。しかし金塚は、昭和31年発行の『高志路』に「六字山その他の土器」と題した記事を掲載し、その中で次のように牡丹山の諏訪神社について触れている（金塚1956）。

「弥生式土器の出土地としては〔北蒲原郡、岩船郡内を除く〕六字山の外新潟市河渡などが比較的海に近く稍遠い地点には新潟市女池、西蒲原郡潟東村五ノ上などがあり、特に五ノ上地内のは耕地面下四五尺から出る。新聞紙の報道や人から聞いた話では、黒埼村緒立八幡宮丘地からも出たということである。新潟市牡丹山の諏訪神社丘からのものは、弥生土器かどうかの判定がまだできていない。」

これは弥生土器の発見についての話題であるが、金塚の指摘から牡丹山の諏訪神社地から弥生土器と判定できないでいる遺物が採取されていたことがわかる。つまり「牡丹山」と注記された埴輪片は、当時、弥生土器として検討されていたものの可能性が高いということである。黒埼村緒立八幡宮丘地の出土品も弥生土器となっているが、これは古墳時代の土師器壺のことであり、当時の資料の同定に不確かさが認められることはこのことからわかる（註4）。

また、注目されたのは「諏訪神社丘」との表記である。現状では周囲が宅地造成され神社地にわずかな高まりが見られるものの、丘と呼べるほどの高さではない。しかし土器が採集された当時は、丘と呼べるほどであったと考えられる。

本間氏が示した公図や『高志路』に見られる金塚の記録などから、この時点で牡丹山の諏訪神社地が古墳であり、金塚所有の埴輪の採集地であったことが、確証はなくても否定できない状況になった。こうした状況を踏まえて、埴輪の存在を2013年5月に刊行された新潟市歴史博物館ニュース『帆檣成林』第28号で紹介した（小林2013）。

そして、新潟大学人文学部の橋本博文教授が2013年8月5日に現地を踏査し、埴輪を採取したことにより、古墳であることがほぼ確実となった。また、埴輪の年代は橋本により川西編年（川西1978）のⅢ期と判断され、古墳時代中期の5世紀前半とされた（註5）。

2. 埴輪表採品

新潟市東区牡丹山諏訪神社に関係すると思われる埴輪片は、現時点で8点確認されている。金塚友之丞旧蔵資料は現地で採集されたとする記録は確認されていないが、上記の経緯やあらたに現地で埴輪が採集されたことにより、牡丹山諏訪神社から採集されたものとする。8点はいずれも破片であり、器形全体の形状は判明しない。

なお、8点中7点を図示する。

金塚友之丞旧蔵資料（1～5）

金塚友之丞旧蔵資料の多くは研究に関する記録であるが、考古資料も含まれていた。そして考古資料の中に埴輪片5点が含まれていた。

1は突帯部で、突帯は比較的大きく、高さ1cm、幅1.2cmで断面は上部が若干くぼむ台形状となる。突帯には貼り付ける際の指のヨコナデが見られ、指を押し付けた痕跡が上部のくぼみとなっている。外面調整はB種ヨコハケ、内面調整はナナメハケ後、ナナメナデが施されている。焼成は普通で、色調はにぶい橙（5YR6/3）を呈する。胎土には円礫の流紋岩とみられる赤色粒子（ ϕ 1～5mm）が多量に含まれるほか、石英（ ϕ 0.5～1mm）、金雲母、長石、輝石（ ϕ 0.5mm）などが認められる。また、わずかながら透かし孔の痕跡が認められた。この破片の内面に墨書で「牡丹山」の文字が記されていた。

2は部位不明の小破片で、外面調整にはタテハケ、内面調整はナナメハケを基調とし、一部ヨコナデが施されている。焼成は普通で、色調はにぶい黄橙（10YR7/3）を呈する。胎土には円礫の流紋岩とみられる赤色粒子（ ϕ 0.5～4mm）、長石、輝石などが認められる。

3・4・5は基部である。

3は外面調整がタテハケで、底部にヨコナデが施されている。また底部には1条の沈線が認められる。内面は器表に摩滅が見られるものの、ナナメハケ、ヨコナデが施されている。焼成は普通で、色調はにぶい橙（5YR6/4）を呈する。また、不明瞭ながら黒斑と思われる黒ずんだ部分も見られ、野焼き焼成

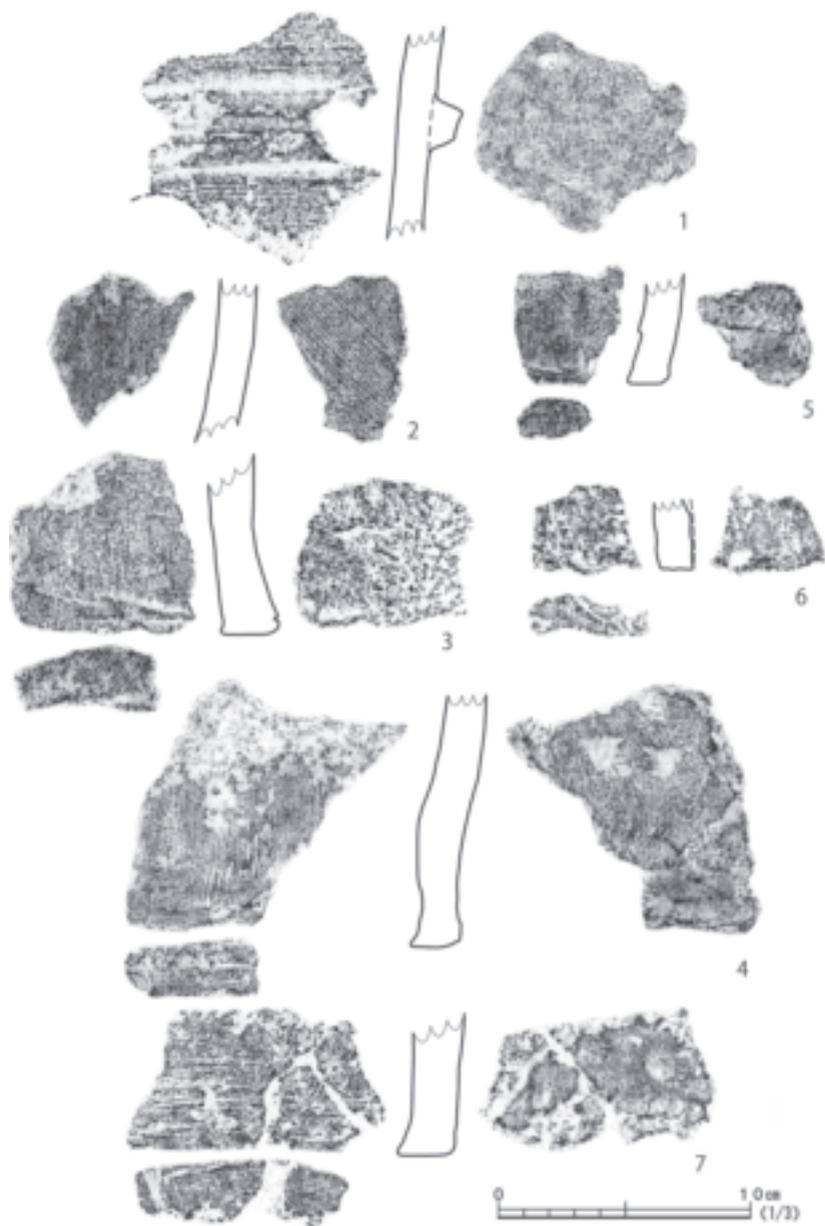


图3 牡丹山諏訪神社古墳採集埴輪実測図

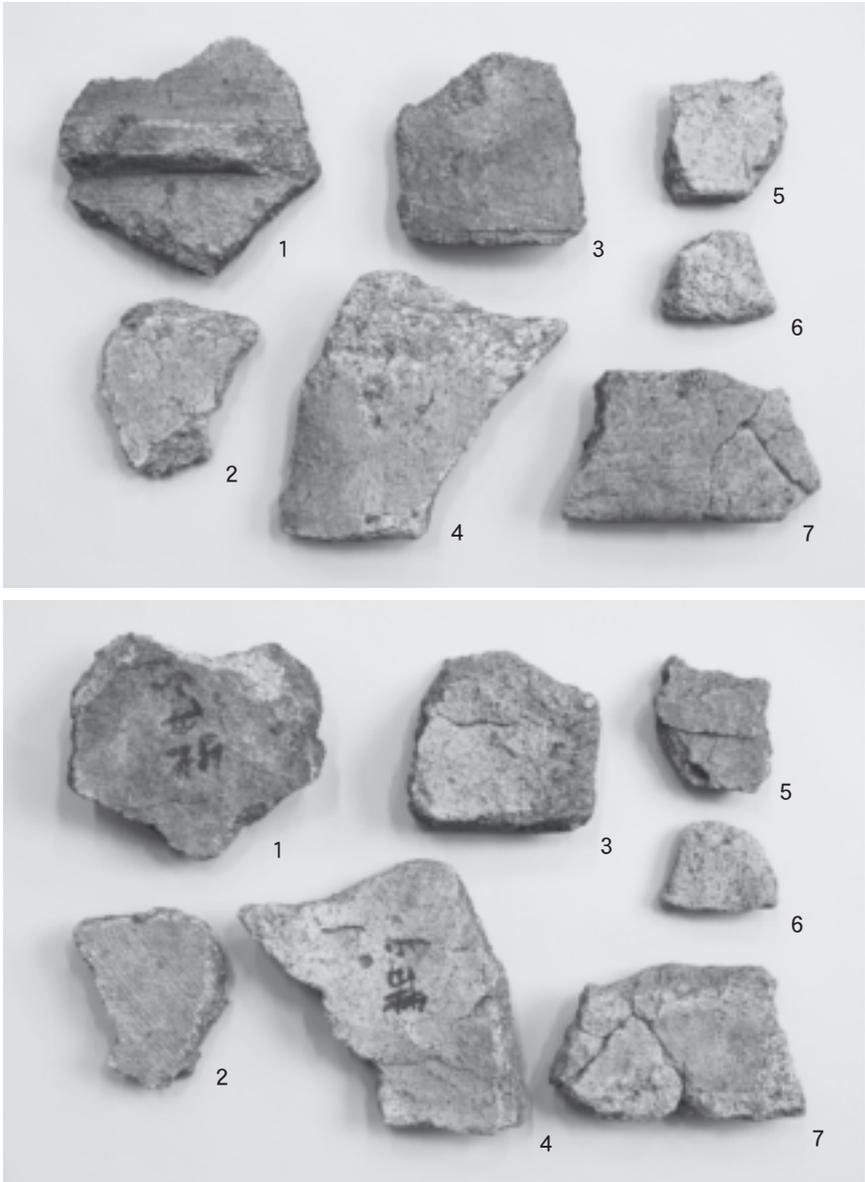


図4、5 上：牡丹山諏訪神社古墳採集埴輪（表）、下：同（裏）

の痕跡とも判断される。胎土には砂粒（ ϕ 1～10mm）が多く、石英、長石、わずかながら円礫の流紋岩とみられる赤色粒子などが認められる。底部径は17cmほどになると思われる。

4は採集品の中で大形の破片である。外面調整はタテハケを基調とし、ヨコハケ・ナナメハケも認められ、底部にはヨコナデが施されている。内面調整はナナメハケを基調にタテハケも認められる。また底部にはヨコナデが施されている。焼成は普通で、色調はにぶい黄橙（10Y R 7 / 3）を呈する。黒斑気味の黒ずんだ部分が見られる。胎土には円礫の流紋岩とみられる赤色粒子（ ϕ 0.5～4mm）が多量に含まれるほか、石英、金雲母（ ϕ 1mm前後）、長石などが認められる。なお、破片上部の摩滅は、突帯の剝離痕と思われる。この破片にも内面に墨書で「牡丹山」の文字が記されていた。

5は器表が摩滅しているものの外面調整にはタテハケが認められる。内面調整にはヨコナデが施されている。焼成は普通で、色調は浅黄橙（10Y R 8 / 3）を呈する。胎土には円礫の流紋岩とみられる赤色粒子（ ϕ 2mm前後）や石英を少量含む。

② 牡丹山諏訪神社地採集資料（6・7）

6は2013年の8月24日に新潟大学大学院生安達俊一氏により表採され、7は同年8月5日に新潟大学の橋本博文教授によって表採された資料である。いずれも基部である。このほか地元の方により突帯部分の破片が同年7月に表採されている。

6は外面は剥落して調整は不明。内面にはユビオサエ、ナデが認められる。焼成は普通で、黒斑気味の黒ずんだ部分が見られる。色調はにぶい黄橙（10Y R 7 / 2）。胎土には金雲母（ ϕ 0.5～1mm）、円礫の流紋岩とみられる赤色粒子（ ϕ 0.5～2mm）、石英、長石などが認められる。

7は外面調整がナナメハケからヨコハケで、底部にヨコナデが施されている。内面調整にはヨコナデ、ユビオサエが認められる。焼成は普通で、黒斑気味の黒ずんだ部分が見られる。色調はにぶい黄橙（10Y R 6 / 3）。胎土は円礫の流紋岩とみられる赤色粒子を多量に含み、石英、長石、輝石（ ϕ 0.5～1mm）な

どが認められる。

3. 「牡丹山」および牡丹山諏訪神社古墳採集埴輪の砂礫

埴輪の表面にみられる砂礫の石種とその粒形・粒径・量を裸眼と肉眼で観察した。観察結果について述べる。これらの結果をもとにすれば、両者の埴輪片に含まれる砂礫はほぼ同じ場所で採取された砂礫と推定される。新潟市歴史博物館所蔵の円筒埴輪の基部片（4）をA、牡丹山古墳で採取された円筒埴輪の基部片（7）をBとする。

埴輪の表面にみられる砂礫

円筒埴輪片A：表面にみられる砂礫種は、岩石片が花崗岩、流紋岩、安山岩、砂岩で、鉱物片が石英、長石、黒雲母、輝石である。花崗岩は、色が灰白色、粒形が亜角、粒径が 0.5mm 、量が1個である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。流紋岩は、色が赤色、黄灰色、灰白色、石基がガラス質である。赤色の流紋岩は、粒形が亜円、粒径が $0.5\sim 6\text{mm}$ 、量が中である。石英の斑晶が目立ち、長石や黒雲母の斑晶を伴うものもある。黄灰色の流紋岩は、粒形が亜角～亜円、粒径が $0.5\sim 6\text{mm}$ 、量が僅かである。灰白色の流紋岩は、粒形が亜角、粒径が $2\sim 7\text{mm}$ 、量がごく僅かである。安山岩は、色が灰色、褐色、粒形が亜角、粒径が $0.5\sim 1\text{mm}$ である。石基がガラス質で、軽石様である。砂岩は、色が茶褐色、粒形が亜円、粒径が $0.5\sim 0.7\text{mm}$ 、量がごくごく僅かである。古期層の砂岩様である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が $0.3\sim 3\text{mm}$ 、量が中である。複六角錐を示すものが多い。長石は灰白色透明、短柱状で、粒形が角、粒径が $0.5\sim 2\text{mm}$ 、量が僅かである。黒雲母は黒色、金色で、板状・粒状、粒径が $0.5\sim 2\text{mm}$ 、量がごくごく僅かである。輝石は暗緑色透明、柱状で、粒形が角、粒径が $0.5\sim 1.5\text{mm}$ 、量がごく僅かである。

砂礫種構成からみれば、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源の砂礫を主とし、花崗岩質岩起源や砂岩起源の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

円筒埴輪片B：表面にみられる砂礫種は、岩石片が花崗岩、流紋岩、安山岩、

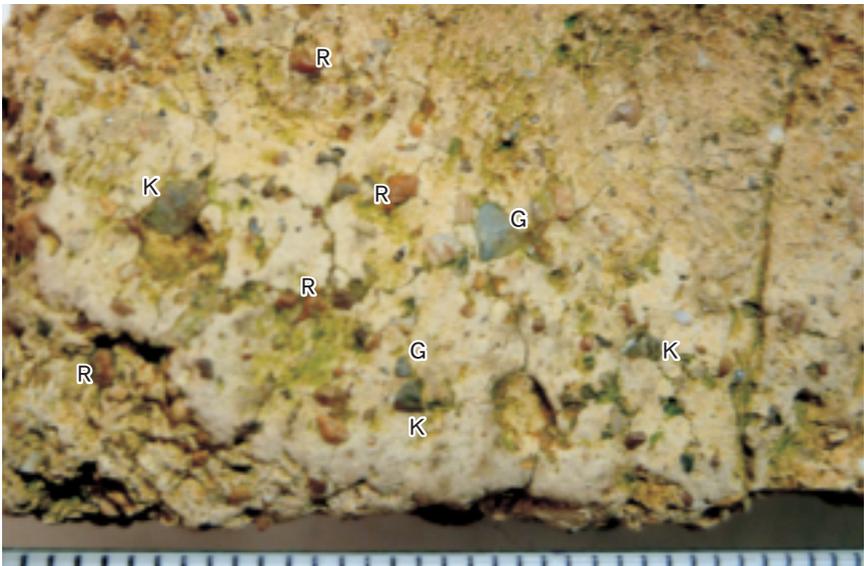
砂岩で、鉍物片が石英、長石、輝石である。花崗岩は、色が灰白色、粒形が亜角、粒径が0.5~0.7mm、量がごくごく僅かである。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。流紋岩は、色が赤色、暗灰色、褐色で、石基がガラス質である。赤色の流紋岩は、粒形が亜角~亜円、粒径が0.5~7mm、量が中である。石英の斑晶が目立つ。暗灰色の流紋岩は、粒形が角~亜角、粒径が0.5~3mm、量が僅かである。褐色の流紋岩は、粒形が角~亜角、粒径が0.5~4mm、量が僅かである。安山岩は1個で、色が灰色、粒形が亜角、粒径が4mmである。石基がガラス質で、長石と輝石の斑晶を伴う。砂岩は、色が灰色、暗灰色で、粒形が角~亜角、粒径が0.5~0.7mm、量がごくごく僅かである。古期層の砂岩様である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3~1mm、量が中である。複六角錐を示すものが僅かに含まれる。長石は灰白色透明、短柱状で、粒形が角、粒径が0.5~1mm、量がごく僅かである。輝石は黒色透明、暗緑色透明で、短柱状、粒形が角、粒径が0.1~0.8mm、量が中である。粒径が0.3~0.8mmの粗い輝石はごく僅かで、混和材の基質をなす土に含まれていたと推定される粒径が0.1~0.2mmの輝石が多い。

砂礫種構成からみれば、流紋岩質岩起源・安山岩質岩起源の砂礫を主とし、花崗岩質岩起源や砂岩起源の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。また、細粒の輝石が多くみられることから、安山岩質岩起源の砂を含む土が使用されている。

以上のように砂礫種構成をもとにすれば、2資料の埴輪片にはほぼ同じような砂礫が含まれていることから同じ地付近の砂礫を採取し、埴輪の胎土としたと推定される。砂礫の粒形は海岸の砂礫のように左右対称の円礫ではなく、角~亜角のものが多く、亜円のはごく僅かである。砂礫の表面は滑らかで、風化が殆どみられない。このようなことから河川の砂礫と推定される。砂礫の採取地については限定できないが、赤色で石英の斑晶が目立つ流紋岩の砂礫が分布する河川を捜せば、その流域の何処かに埴輪の砂礫と同じような砂礫構成を示す砂礫の分布地を見つけることができるだろう。



円筒埴輪片A 赤色の流紋岩=R 灰白色の流紋岩=E 黄灰色の流紋岩=Y (1目盛り=1mm)



円筒埴輪片B 赤色の流紋岩=R 暗灰色の流紋岩=G 褐色の流紋岩=K

4. 近隣地域の5世紀前半代の円筒埴輪

次に、東日本近隣地域において牡丹山諏訪神社古墳とほぼ同時期、5世紀前半代の古墳の円筒埴輪を瞥見してみたい。

① 宮城県名取市経の塚古墳^{きょうのづか}

太平洋沿岸部の砂丘上に立地する。直径36mほどの円墳とされる。主体部は粘板岩製の変形長持形石棺である。直弧文を施した柄をもつ刀子が出土している。埴輪には、円筒埴輪の他に、家形埴輪、短甲形埴輪が存在する。円筒埴輪は突帯2条で口唇部と突帯に特殊な刻み目を有する。外面一次縦ハケのうち、二次のナナメハケを施す。他に、外面2次調整B種ヨコハケのものも存在する。黒斑が認められ、野焼きである。短甲形埴輪は三角板革綴式短甲をモデルにしている。

② 茨城県石岡市舟塚山古墳

関東地方第2位の規模を誇る全長186mの前方後円墳である。円筒埴輪は外面2次調整タテハケを施し、ヨコハケは確認できない。突帯は断面方形を呈し、やや細く、比較的高い。透かし孔には縦長長方形が存在する。基部成形を経ずに、一気に粘土紐を積み上げる。器肉はやや薄く、黒斑を有する。

③ 茨城県水戸市愛宕山古墳

水戸市内最大の全長136.5mの前方後円墳である。円筒埴輪は外面2次調整にB種ヨコハケがみられる。透かし孔は1段の中で円形と方形が交互に計4個配され、やや古い様相が認められる。黒斑をもつ。

④ 茨城県那珂郡東海村真崎権現山古墳

全長87mの前方後円墳である。特異な寸胴の土管状の円筒埴輪が出土している。鏢状の高い突帯をもつ。外面調整に粗い格子タタキが見える。黒斑が認められる。

⑤ 千葉県香取市三之分目^{さんのおけめ}（豊浦）大塚山古墳

下総最大の規模を有する全長123mの前方後円墳である。長持形石棺系の組合せ式石棺をもつ。円筒埴輪は比較的薄手で、基部成形をせずに粘土紐を積んでいく。外面2次調整タテハケないしは板ナデを施す。透かし孔は方形

と円形が確認されている。黒斑を有する。

⑥ 東京都世田谷区野毛大塚古墳

全長82mの帆立貝式古墳である。中心主体は粘土槨で、三角板革綴式衝角付冑と、長方板革綴式短甲、頸甲、肩甲がセットで出土している。築造年代は5世紀前葉に遡る。第二主体に長持形石棺の影響を受けたともみられる組合せ式石棺を採用している。副葬品の各種石製模造品が著名である。埴輪の種類には円筒埴輪の他に柵形、家形、水鳥形がある。円筒埴輪は突帯2条3段構成で、外面調整は1次タテハケのみのものと、2次調整B種ヨコハケを加えるものが存在する。透かし孔は円形である。黒斑をもつ。

⑦ 埼玉県東松山市雷電山古墳

全長85mの帆立貝式古墳である。円筒埴輪は3条突帯で、中には突帯の無いものもある。突帯の断面形は稜が2～3ある、いわゆる「多稜突帯」である。外面調整は土器的なナデ仕上げである。透かし孔は円形の他に、巴形崩れのハート形、三角形などがある。他に田の字形に長方形透かし孔を並べたものもある。いずれも特異であるが、特に倒立成形である点が注目される。同一段に4個の透かし孔とその千鳥状配置も古い様相である。

⑧ 埼玉県本庄市児玉町^{かなさな}金鑽神社古墳

直径69mの円墳である。円筒埴輪は2条突帯の寸胴の形態を呈する。外面調整はナデ後、格子叩きを施すものと、ナデ調整のみのもの、1次タテハケ調整の後、一部ナデを加えるもの、1次タテハケ調整のみのものと多様である。いずれも黒斑を有する。透かし孔は半円形で、透かし孔の位置に×字状の線刻があるものが認められる。その他陶質土器にも見られる蜘蛛の巣状線刻も存在する。なお、タテハケ調整のみのものは淡輪技法に伴う底部設定技法に似た段差がある。朝顔形埴輪の肩部には円形透かし孔が穿たれているものもある。

⑨ 埼玉県児玉町^{なまのやま}生野山將軍塚古墳

直径60mの円墳である。墳頂部に粘土、墳裾に箱式石棺がある。石棺から鉄剣、有肩鉄斧、鉄製鎌が出土した。円筒埴輪の外面調整に格子叩きを施すものが存在する。

⑩ 埼玉県本庄市公卿塚古墳

直径50mの円墳である。円筒埴輪は、突帯3条以上のものも含む。外面調整は多様で、1次タテハケのみのもの、2次調整B種ヨコハケのもの、1次調整でタテ・ヨコ・ナナメに無秩序なハケメ調整のもの、ハケメのち格子タタキを施すものなどがある。透かし孔は、方形、半円形、円形などが認められる。その他、家・盾・甲冑・柵形あるいは囀形などの形象埴輪が存在する。

⑪ 埼玉県志度川古墳

直径40mの円墳である。円筒埴輪の他に朝顔形埴輪が存在する。外面調整はB種ヨコハケであり、格子叩きは確認できない。

⑫ 栃木県宇都宮市笹塚古墳

下野第3位の規模の全長約100mの前方後円墳である。円筒埴輪は、外面調整タテハケが主体で、B種ヨコハケも認められる。透かし孔は円形が主体である。黒斑をもつ。

⑬ 栃木県佐野市八幡山古墳

直径40mの円墳である。竪穴式石室から三角板革綴式の衝角付冑と短甲、竪櫛などが出土している。円筒埴輪には、外面調整B種ヨコハケが確認され、黒斑がみられる。

⑭ 栃木県足利市勸農車塚古墳

全長80mほどの前方後円墳とされる。外面調整タテヘラナデが主体を占める。透かし孔は円形の他、半円形が確認されている。黒斑を有する。太田天神山古墳の埴輪に類例がある。

⑮ 群馬県太田市別所茶臼山古墳

全長168mの前方後円墳である。外面調整は二次タテハケ主体で、一部B種ヨコハケが認められる。東日本でB種ヨコハケを導入した最古の古墳の一つである。L字型（鍵形）の他、方形、円形の透かし孔を有する。断面M字形の突出度の高い突帯をもつ。黒斑が認められる。

⑯ 群馬県太田市天神山古墳

全長210mの東日本最大の前方後円墳である。「王の棺」と異名をとる長持

形石棺を有する。やや馬蹄形気味の盾形二重の周濠をもつ。円筒埴輪は、3条突帯のものがある。外面1次タテハケの他、板ナデ、2次調整B種ヨコハケが確認されている。黒斑を有する。透かし孔は円形の他方形が認められる。口唇部と突帯上にヘラによる刻み目をもつものも知られる。突帯剥離面に凹線が見られる。他に、家・器財・水鳥形の形象埴輪が出土している。

⑰ 群馬県太田市女体山古墳

全長104mほどの帆立貝式古墳である。太田天神山古墳に隣接し、主軸も方位を等しくする。外面1次タテハケの他、2次調整B種ヨコハケが確認されている。黒斑を有する。透かし孔は縦長長方形と円形が認められる。

⑱ 群馬県太田市目塚1号墳

直径21mの円墳である。円筒埴輪は4条突帯で、外面2次調整B種ヨコハケがみられる。透かし孔は円形が多く、方形も知られる。突帯剥離面の凹線が認められる。

⑲ 群馬県太田市天神山古墳A陪塚

直径29mの円墳である。円筒埴輪は3条突帯以上で、2・3段に外面2次調整B種ヨコハケが施される。基部と口縁部は1次タテハケのみのようである。透かし孔には方形と半円形がみられる。

⑳ 群馬県伊勢崎市お富士山古墳

全長123.5mの伊勢崎地域最大の前方後円墳である。太田天神山古墳と同様に長持形石棺をもつ。変形捩文鏡と石製模造品の刀子の出土が知られている。円筒埴輪は外面2次調整B種（B種とB種）ヨコハケとタテハケ、板ナデが認められる。透かし孔は円形の他に、方形・半円形が確認されている。黒斑を有する。突帯の上にハケ原体による斜めの刻み目を入れるものが存在する。突帯剥離面に突帯設定のための凹線状痕跡が見られる。

㉑ 群馬県藤岡市白石^{しろいし}稲荷山古墳

全長170mほどの前方後円墳である。主体部に中心からはずれた礫塚を2つもつ。礫塚中の副葬品の中に曲刃鎌をかたどった石製模造品があり、より深い中心部にもう一つ古い埋葬施設の存在する可能性がある。円筒埴輪は3条突帯で、2次外面調整B種ヨコハケの他に、1次タテハケ、板ナデもみ

られる。透かし孔は円形の他に半円形、縦長長方形も認められる。板ナデ調整の個体で突帯の上に刻み目が確認されている。他に赤堀茶白山古墳と同様、家形埴輪群の出土で知られている。また、三角板革綴式短甲と革製草摺を模した短甲形埴輪もある。

② 群馬県藤岡市十二天塚古墳

26.8m×36.8mの長方形墳である。白石稲荷山古墳の陪塚的な位置に在る。円筒埴輪は白石稲荷山古墳と同様な3条突帯の他に2条突帯のものが混在する。外面調整B b種ヨコハケが確認できる。基部に円形透かし孔を穿つ個体が存在する。

③ 群馬県高崎市片山1号墳

直径33mほどの円墳である。長大な粘土槨を有し、仿製内行花文鏡をはじめ、竪櫛40、鉄製農工具の鎌・斧・鉞、滑石製模造品の斧・刀子などを出土した。埴輪は円筒埴輪の他、鱗飾りをもつ家形埴輪の存在が知られている。円筒埴輪は器台円筒が見られ、口縁部が屈曲する。外面調整はナデを多用し、透かし孔は縦長の長方形である。突帯は少ない印象を受ける。前期末～中期初頭の古墳である。

④ 長野県牟礼村庚申塚古墳

全長約52mの前方後円墳である。直径16cm程度に復元される小さな円筒埴輪が注目される。外面調整はハケのち格子叩きである。

⑤ 長野県須坂市天神1号墳

一辺30mほどの方墳である。外表に礫を積んで、一見積石塚風である。普通円筒と朝顔形円筒埴輪の他、家形埴輪・蓋形埴輪・腰掛形埴輪などの形象埴輪が存在する。外面調整は2次調整横ハケが主体を占めるが、中に格子叩き目をもつ円筒埴輪が認められる。須恵器の技法である叩きに併用される当て具痕が見られない。内面はハケ調整である。基部外面は1次調整タテハケのみで、基部に円形透かし孔をもつ。基部の端部近くの内面に基底面に平行する水平なくぼみが巡っており、径を一定に保つための当たりの痕跡ともみられる。基部内面は斜めユビナデである。

⑥ 長野県千曲市土口將軍塚古墳

全長約68mの前方後円墳である。並列する2つの竪穴式石室が発見されている。副葬品として三角板革綴式短甲・鉄鏃・玉類が出土している。埴輪は普通円筒埴輪の他に朝顔形円筒埴輪が確認されている。突帯2条で、外面ナデ調整が主体。格子叩きも認められる。綾杉形の線刻模様をもつものもみられる。円形の透かし孔が知られる。朝顔形埴輪は頸部にも円形透かし孔を有する。突帯は断面M字形のものがある。黒斑をもつ。

⑳ 長野県千曲市倉科將軍塚古墳

全長約73mの前方後円墳である。土口將軍塚古墳に後続する首長墓と考えられている。外面調整は2次タテハケの他、断続ヨコハケであるB種ヨコハケが確認されている。基部外面はタテハケのみ。逆三角形と円形の透かし孔が存在する。突帯の断面形には方形・台形・三角形気味のものが認められる。

㉑ 長野県千曲市五量眼塚古墳

直径約40mの円墳である。円筒埴輪の他、朝顔形埴輪が確認されている。外面調整はナデが主体で、2次タテヘラナデ、B種ヨコハケも認められる。内面はナデである。突帯は断面台形が主である。三角形透かし孔の存在が知られる。

㉒ 長野県千曲市森2号墳

直径20mの円墳である。突帯2条で構成される。透かし孔は縦長ないしは横長の長方形の個体が主で、前者が多い。正三角形と逆三角形の透かし孔を千鳥に配置するものもある。朝顔形埴輪には肩部にも円形透かし孔が認められる。外面2次調整タテハケである。突帯の突出度が飛び抜けて高い特徴を示す。黒斑を有する。

㉓ 長野県中野市七瀬双子塚古墳

全長61mの前方後円墳である。三角板革綴式短甲・仿製八乳鋸歯文鏡・鉄剣・直刀・鉄槍・鉄鏃などが出土している。突帯は断面三角形気味で高い。外面調整はタテハケである。

㉔ 長野県埴科郡坂城町 ^{ひがしっぴら}東平2号墳

一辺12.1m×12.8mの方墳。木棺直葬で、玉類50点と竪櫛5点が出土している。胴部の長い壺形埴輪の他に、ずんぐりした特異な円筒埴輪が存在す

る。土器作り集団が製作したものと推定される。突帯1条のものと2条のものがある。1条のものは鉢形を呈し、基部を底部穿孔状にする。突帯は貼り付け突帯ではなく、擬口縁状の作りとなっている。朝顔形埴輪の上部の形にも似ている。突帯2条のものは胴部にやや丸みをもっている。突帯は断面三角形をなす。外面調整はタテハケが一部に見られ、ナデで仕上げられる。内面は横ヘラナデである。

③② 石川県羽咋市滝大塚古墳

全長90.5mの帆立貝式古墳である。円筒埴輪は外面2次調整B種ヨコハケで、黒斑を有する。B種ヨコハケは基部に施すものと施さないものの両方が認められる。B種ヨコハケの止めのピッチは4～5cmと比較的短い。

③③ 石川県羽咋市滝5号墳

円墳とされるが、規模は不明である。滝大塚古墳の付近に存在した。円筒埴輪は、外面2次調整B種ヨコハケをもち、黒斑を有する。器肉は比較的薄い。

③④ 石川県鹿島郡中能登町水白鍋山古墳

全長64mの帆立貝式古墳である。円筒埴輪は外面2次調整B種ヨコハケで、黒斑を有する。

③⑤ 石川県宝達志水町森本大塚古墳

直径38mの円墳である。円筒埴輪は外面2次タテハケないしはB種ヨコハケが認められる。黒斑を有する。突帯は比較的しっかりした断面台形で、突帯を貼る前に2本の平行な沈線を入れる。投錨効果を狙った技法か、突帯設定位置の当たりと推定される。基部の外面は1次調整タテハケのままか、2次調整を入れてもヨコハケは粗いものである。

③⑥ 石川県金沢市長坂二子塚古墳

全長50mの前方後円墳である。円筒埴輪は突帯、円形透かし孔、外面調整タテハケをもつが、胴部が膨らんだ器形をなし、通常の円筒埴輪とは趣を異にする。共伴する長胴の黒斑を有する壺形埴輪の影響を受けている可能性がある。なお、壺形埴輪は焼成前底部穿孔で、外面にハケ調整を僅かに残すナデ調整が主体である。また、肩部に半円形の線刻模様をもつ。

③⑦ 福井県坂井市六呂瀬山3号墳

全長90mの前方後円墳である。外面2次調整タテハケに加えて、ヨコハケも認められる。ただし、ヨコハケの詳細は不明である。透かし孔は円形と方形が確認される。基底部に剣先形の切り込みをもつものがある。また、底径が40cmを超える大型の個体も存在する。円筒埴輪の他に蓋形埴輪や家形埴輪も出土している。黒斑を有する。

③⑧ 福井県福井市免鳥長山古墳

全長90.5mの帆立貝式古墳である。円筒埴輪の外面調整はタテ・斜めハケの他、B種ヨコハケが確認できる。透かし孔は円形に統一される。中には最下段基部に円形透かし孔をあける個体もある。その基部にB種ヨコハケをしっかりと入れるものもある。基底部に剣先形の切り込みを入れる個体も認められる。底径は20~27cm止まりで、六呂瀬山3号墳のものよりは小振りである。

③⑨ 福井県福井市重立山4号墳

直径20mほどの円墳である。円筒埴輪は1次タテハケで黒斑を有する。円形透かし孔が存在する。同一古墳群中の1号墳の円筒埴輪も同様な属性をもつ。

④⑩ 福井県福井市西谷山2号墳

20×23.5mの円墳である。埴輪の詳細は不明である。

④⑪ 福井県永平寺町^{ひのきざか}松ノ木坂5号墳

直径27mの円墳である。2基の埋葬施設から鉄剣と直刀が出土している。円筒埴輪の他、家形埴輪がみられる。円筒埴輪は外面調整B種ヨコハケが施され、黒斑を有する。透かし孔は円形である。口縁部端部は急激に外反する。基底部内面に横ヘラ削りを施すものもある。断面台形の突帯をもつ。

④⑫ 福井県永平寺町吉野八幡神社古墳

直径20mほどの円墳である。埴輪の詳細は不明である。

④⑬ 福井県敦賀市向井出山2号墳

直径16mの円墳である。割竹形木棺をもつ。葺石がある。

④⑭ 福井県三方上中郡若狭町上^{じょうのつか}ノ塚古墳

全長約100mの若狭最大の前方後円墳である。円筒埴輪の他に、朝顔形埴輪、家形埴輪が確認されている。円筒埴輪は黒斑を有し、外面2次調整タテハケが主体を占めるが、その他、B b種ヨコハケがみられる。透かし孔は円形である。底径は19.2cmのものが確認されている。他に、木柱の出土があり、蓋形木製品の樹立が想定されている。葺石は墳丘側だけでなく、周濠外周内斜面にも葺かれている（中司1997）。

④5 福井県三方上中郡若狭町藤井岡古墳

直径27mの円墳である。墳頂部縁辺で円筒列が確認されている。円筒埴輪は5世紀前半の特徴を有する。葺石が存在する（東2013）。

5. 考察

以上、5世紀前半の埴輪が越後の牡丹山諏訪神社古墳と東北経の塚古墳で直径30～36mほどの中小規模の円墳に採用されていることが注目される。接する関東では、各地の最有力の前方後円墳を中心に認められる。そのうち、群馬（上毛野）では、主墳と陪塚という関係で大型前方後円墳から大型帆立貝式古墳、小型円墳という階層構造の中で埴輪が導入されている。武蔵では南・北のいずれも野毛大塚古墳と雷電山古墳というように大型の帆立貝式古墳に見られる。また、北武蔵の中型の円墳に叩き整形の円筒埴輪が存在する。

長野（科野）では、北信の庚申塚古墳・土口将軍塚古墳・倉科将軍塚古墳のように、50～70mクラスの中規模前方後円墳を中心に叩き整形の埴輪が確認されるが、中には天神1号墳のように特異な小型方墳にも採用され、興味深い。あるいは、渡来系工人の関わりも想定される。

越後と同じ日本海側の北陸では、越後に接する越中で今のところ当該期の埴輪は確認されていない。能登では大型の帆立貝式古墳を中心に、中規模円墳にも埴輪がみられる。しかし、前方後円墳では未確認である。加賀では、中小規模の前方後円墳、長坂二子塚古墳に唯一埴輪が認められる。越前では、大型の帆立貝式古墳の免鳥長山古墳を除くと直径20m前後の小型円墳である。さらに、若狭では大型前方後円墳の上ノ塚古墳と小型の円墳からなるようである。

このように、当該期の5世紀前半代の埴輪は、東日本の各地域によって受容の仕方が異なる。ヤマト王権と在地勢力との複雑な関係がそこに読み取れる。

ところで、金塚コレクションにおける5片中の2片の裏面に墨書による「牡丹山」の注記がある。一方、それらを入れていた箱蓋の注記は、1行目に元々「北南蒲 紫雲寺」とあり、中蒲原郡を指すと考えられる「中」の字を「北」の上のせ、「南」の字に×印が記されている。また、その後の「紫雲寺」が縦の3本線で消されている。箱の中央には、他の字よりも大きく「牡丹山」と書かれ、その下に行書で「河渡」と記されている。よって、この箱の中のものは、「牡丹山」のものがメインであったことがうかがえる。さらに、3行目と4行目の上部の文字が2、3本の線で消されている。消された文字は「加茂」「河船川」「ツブ山」と推定される。そして4行目下部（箱蓋左下）に「築上山」の文字がある。箱書きの「牡丹山」と埴輪片2片の「牡丹山」の注記は、「丹」の字に書き方の違いがあるが、同一筆者のものと考えられる。金塚友之丞の筆跡を確認していないが、おそらく金塚氏本人のもので、後世、別人が記したものではなからう。

なお、箱身の小口にも、右から横に「牡丹山河渡築上山」と墨書され、「築上山」が横4本線で消されている。箱の中には、埴輪片5片の他、「河渡 39.10.16」の注記のある封筒と「河渡」の注記のある封筒、「築上山」の注記のある封筒が入っており、前二者には8～9世紀の須恵器坏等が納められていた。また、後者の「築上山」の封筒は空だった。現在「牡丹山」の地名の残る新潟市東区は旧郡で略称「中蒲」こと中蒲原郡に属していた。よって、「中蒲」と新潟市東区「牡丹山」とは整合することになる。

埴輪胎土では安山岩は信濃川の上流にあり、流紋岩は信濃川の支流の魚野川・破間川・五十嵐川の上流の他、新津丘陵、阿賀野川の支流、加治川の上流などにもある。花崗岩は阿賀野川の上流に多くみられる。よって、牡丹山諏訪神社の埴輪胎土から、混和材としての砂礫は、信濃川と阿賀野川の合流する牡丹山諏訪神社周辺で採集が可能という結論に達した（新潟県1977）。

表 東日本における5世紀前半の円筒埴輪属性比較（東海地方を除く、2014.3.3橋本作成）

No.	所在地	古墳名	墳形	規模(m)	突帯数	突帯断面			
						M字	方形	台形	ほか
0	新潟	牡丹山諏訪神社	円	30	—			○	
1	宮城	経の塚	円	36	2			○	
2	茨城	舟塚山	前方後円	186	3以上				
3	茨城	水戸愛宕山	前方後円	136.5					
4	茨城	真崎権現山	前方後円	87				○	
5	千葉	三之分目大塚山	前方後円	123				○	
6	東京	野毛大塚山	帆立貝	82	2		○		
7	埼玉	雷電山	帆立貝	85	3				多稜
8	埼玉	金鑽神社	円	69	2			○	
9	埼玉	生野山將軍塚	円	60					
10	埼玉	公卿塚	円	50	3以上		○	○	
11	埼玉	志度川	円	40				○	
12	栃木	笹塚	前方後円	100					
13	栃木	佐野市八幡山	円	40					
14	栃木	勸農車塚	前方後円	80				○	
15	群馬	別所茶臼山	前方後円	168		○			
16	群馬	太田天神山	前方後円	210	3		○		
17	群馬	女体山	帆立貝	104			○		
18	群馬	目塚1号	円	21	4				
19	群馬	天神山古墳A陪塚	円	29	2以上		○		
20	群馬	お富士山	前方後円	123.5			○		
21	群馬	白石稲荷山	前方後円	170	3		○		
22	群馬	十二天塚	長方	26.8×36.8	2と3			○	
23	群馬	片山1号	円	33		○			
24	長野	庚申塚	前方後円	52					
25	長野	天神1号	方	30				○	
26	長野	土口將軍塚	前方後円	68	2	○			
27	長野	倉科將軍塚	前方後円	73				○	三角
28	長野	五量眼塚	円	40				○	三角
29	長野	森2号	円	20	2		○		
30	長野	七瀬双子塚	前方後円	61					三角
31	長野	東平2号	方	12.1×12.8	1と2				三角
32	石川	滝大塚	帆立貝	90.5			○		
33	石川	滝5号	円	不明			○		
34	石川	水白鍋山	帆立貝	64		○	○		
35	石川	森本大塚	円	38				○	
36	石川	長坂瀬子塚	前方後円	50	2			○	三角
37	福井	六呂瀬山3号	前方後円	90					
38	福井	免鳥長山	帆立貝	90.5	3 or 4		○		
39	福井	重立山4号	円	20				○	
40	福井	西谷山2号	円	20×23.5					
41	福井	松ノ木坂5号	円	27				○	
42	福井	吉野八幡神社	円	20					
43	福井	向井出山2号	円	16					
44	福井	上ノ塚	前方後円	100				○	
45	福井	藤井岡	円	27				○	

(B種ヨコハケの細分は、一瀬2005による.)

外面調整	内面調整	透孔形態	焼成	平均大きさ(cm) (口径×底径×器高)	その他
B種ヨコハケ	ナデ	○	黒斑?	(—×17or32×—)	
ナメハケ・B種ヨコハケ	ナデ	○	黒斑	(39.5×23.4×65.7)	突帯・口唇部刻み目
2次タテハケ		□	黒斑		基部成形を欠く
B種ヨコハケ		□・○	黒斑		透孔同一段4個
格子タタキ	ナデ		黒斑	(25~26×—×—)	
タテハケ・板ナデ		□・○	黒斑	(—×21~24×—)	基部成形を欠く
1次タテハケ・B種ヨコハケ	タテハケ・ナメナデ	○	黒斑	(42.7×27.6×50.4)	
ナデ	ナデ	○・△・▽・田	黒斑	(34.2×29.3×56.0)	倒立成形
格子タタキ・ナデ・タテハケ	ヘラナデ	半円	黒斑	(39.0×38.7×57.0)	
格子タタキ			黒斑		
1次タテハケ・B種ヨコハケ・無秩序なハケメ・タタキ	タテナデ・ナメナデ・タテハケ・ナメハケ	□・○・半円	黒斑	(—×31.2×—)	
B種ヨコハケ			黒斑		
タテハケ・ヨコハケ		○	黒斑		
B種ヨコハケ			黒斑		
タテヘラナデ	ヘラナデ	○・半円	黒斑	(—×33.0×—)	
2次タテハケ・B種ヨコハケ	ハケ・ナデ	□・○・鍵形	黒斑		
1次タテハケ・板ナデ・B種ヨコハケ	ナデ	○・□	黒斑	(46.1×31.0×52.8)	突帯・口唇部刻み目
1次タテハケ・B種ヨコハケ	ナデ	○・□	黒斑		突帯・口唇部刻み目
B種ヨコハケ	ナデ	○・□	黒斑	(32.4×30.8×72.6)	
B種ヨコハケ		□・半円	黒斑		
B種ヨコハケ・B種ヨコハケ・B種ヨコハケ・タテハケ・板ナデ	ナデ・ヘラナデ	○・□・半円	黒斑	(—×27.0×—)	突帯・口唇部刻み目
1次タテハケ・B種ヨコハケ・板ナデ	ナデ・ヨコハケ(口縁部)	○・□・半円	黒斑	(30.6×24.7×58.0)	突帯刻み目
B種ヨコハケ	ナデ一部斜めハケ	○	黒斑	(35.2×22.2×43.4)	
ナデ	ナデ	□	黒斑	(32.0×22.6~34.4×—)	
ハケ後格子タタキ			黒斑	(16×—×—)	
ヨコハケ・格子タタキ	ハケ	○	黒斑	(—×24.6×—)	
ナデ・格子タタキ・ハケ	ナデ・ハケ(少数)	○	黒斑	(25.1×29.1×61.0)	
2次タテハケ・B種ヨコハケ	ナデ・ハケ	○・▽	黒斑	(41.0×37.5×—)	
2次タテヘラナデ・B種ヨコハケ	ナデ	▽	黒斑	(32.8×27.7×—)	
2次タテハケ	ハケ・ナデ	□・△・▽・○	黒斑	(26.7×28.2×55.2)	
タテハケ	ハケ・ナデ	なし?	黒斑	(—×19.2×—)	
ナデ(一部タテハケ)	ナデ	なし	黒斑	(25.0×16.1×24.6)	
B種ヨコハケ	ナデ・ハケ		黒斑	(—×28.0×—)	
B種ヨコハケ	ナデ		黒斑		
B種ヨコハケ	ナデ・ハケ(口縁部)	▽	黒斑	(35.3×22~27×—)	
2次タテハケ・B種ヨコハケ			黒斑		
タテハケ		○	黒斑	(22.6×—×—)	
2次タテハケ・ヨコハケ		○・□	黒斑	(—×40+α×—)	基部刻先形切込み
タテ・ナメハケ・B種ヨコハケ	ナデ	○	黒斑	(25.9×18~27×—)	基部刻先形切込み
1次タテハケ	ナデ・ハケ(一部)	○	黒斑		
			黒斑		
B種ヨコハケ	ナデ・ハケ(口縁部)	○	黒斑		底部調整内面ヘラケズリ
			黒斑		
			黒斑		
2次タテハケ・B種ヨコハケ	ユビナデ	○	黒斑	(—×19.2×—)	
			黒斑		

当古墳の立地から想定される被葬者の生前の活動を考えれば、その埴輪胎土に象徴される内陸部の信濃方面と会津方面の正に結節地点に位置していたことが裏付けられる。

6. まとめ

以上、新潟県内で初めて確認された円筒埴輪について表面採集資料の断片的な資料から検討を行った。その結果、「牡丹山」と注記された金塚氏採集資料と、新潟市東区牡丹山諏訪神社境内地での橋本採集資料とが胎土に共通性があることから、同一場所から採集されたものであることを結論付けた。その上になたて、総合的に検討したところ、外面2次調整に川西分類のB種ヨコハケが存在し、焼成に一部黒斑が認められることから、川西編年Ⅲ期の5世紀前半の円筒埴輪であることを認めた(註6)。5世紀前半の埴輪の類例は、東日本では、隣接する群馬県地域に比較的多く認められる。しかし、そこから入ってきたものではなかろう。北陸地方では埴輪をもつ古墳は100例近く確認され、そのうち5世紀前半代のもは管見ながら14例知られている。福井県で9例、石川県で5例あるが、隣接する富山県では今のところ未確認である(註7)。一方、中部地方の長野県では8例の出土例がある。逆に、新潟から北の東北地方では、同時期の5世紀前半の円筒埴輪は太平洋側の宮城県名取市経の塚古墳の1例のみであり、日本海側のこの牡丹山諏訪神社古墳のものとは系譜関係はないと判断される。経の塚古墳の円筒埴輪は特異なもので、その口唇部や突帯に刻みを入れる類例として群馬県地域、上毛野地域のものとの関連性が指摘される(橋本1996)。両者に長持形石棺系譜の石棺が存在することはその傍証となろう。

ところで、日本海側に位置する山形県内には長持形石棺系の石棺が2例確認されている。大師森山洞窟の石棺と鶴岡市菱津の石棺である。いずれも5世紀前半の時期が想定されている(菊地2012)。両者とも出土古墳の実態が明らかでないが、後者を出土した現地を踏査した限りでは、埴輪は採集できない。おそらく埴輪は導入されていなかったものとみられる。

新潟県内では、牡丹山諏訪神社古墳の円筒埴輪を除くと、他に円筒埴輪は確

認されていない。唯一、南魚沼市飯綱山10号墳から壺形埴輪が出土しているのみである。飯綱山10号墳は5世紀中頃から後半にかけての古墳で、牡丹山諏訪神社古墳よりも若干新しい。器種でも、円筒埴輪と壺形埴輪の違いがあり、同一系譜のものではないことは明らかである。

7. 埴輪発見の意義と課題

牡丹山の諏訪神社地で埴輪が発見されたことの意義は大きい。要約すると、①新潟県内の埴輪では南魚沼市飯綱山古墳群10号墳出土の壺形埴輪に次いで2例目の確認例であり、円筒埴輪では県内初の出土であること。②新潟平野では例のない古墳時代中期の古墳が存在したと考えられること。③信濃-越後-会津、さらには、出羽の庄内平野、あるいは、佐渡、能登をはじめとする北陸や、はるばる西日本の畿内と繋る交通の要衝となる、信濃川と古・阿賀野川の合流点、河口に近い砂丘上に築かれていることなどである。

6世紀に存在したとされる古志深江国造の推定本貫地や7世紀中頃に造営されたとされる淳足柵比定地に近接したところに先行する5世紀代の古墳の存在がほぼ明らかとなったことにより、今後の発掘調査による古墳の解明とそれに伴う被葬者像の探求が期待される。

おわりに

今後、当古墳に関しては、今年9月に発掘調査を計画している。埴輪については資料が増加した時点で再度検討したい。本稿の執筆は、第1・2章を小林、第3章を奥田、第4～6章を橋本、第7章を小林と橋本で分担し、全体を橋本が補足した。

<謝辞>

資料の提供および図版の作成で安達俊一氏、比較資料の実見に当たって、高橋克壽、浅野良治、田邊朋宏、前田清彦、深川義之の各氏にお世話になった。ま

た、胎土分析関連で、小林巖雄、松岡 篤、坂井陽一の各氏にもご教示いただいた。併せて御礼申し上げる次第である。

〈註〉

(註1)新潟県内の郷土史家。民俗学研究者。昭和4年から14年まで新発田中学教師を務め、昭和15年から北越高校の前身、北越商業高校で教壇に立つ(木村2011)。昭和初期から40年頃まで新潟県内各地で遺跡等の踏査を行い、考古資料などのコレクションを残す一方で、郷土史の幅広い執筆活動を行った。

(註2)寛文十二(1672)年の「四度目沼垂町割王瀬山崩西川会河新潟川端堀口両湊絵図」や延宝八年(1680)年の「新潟町沼垂町論所立会絵図」などの近世の絵図に、牡丹山村の諏訪神社にあたる位置に独立した山が描かれている。

(註3) 本間誠氏は歴史・考古学の愛好者である。新潟市歴史博物館で展示されていた埴輪の見学を機に独自に調査し、自身の考えを博物館へ伝えた。

(註4) この壺は昭和27(1952)年に緒立八幡宮境内の工事の際に発見された。『黒埼町史 通史編』では、この壺の発見や鑑定にまつわるエピソードを昭和27年8月10日の新潟日報記事とともに紹介している。新潟日報の記事には、「三千年前のものか 西蒲に彌生式大瓶発見」との見出しが付いている(黒埼町2002)。

(註5) 新潟市文化財センター主催で2013年8月18日に開催された「シンポジウム 蒲原平野の王墓 古津八幡山古墳を考える — 1600年の時を越えて —」において、橋本博文氏が埴輪片の表面に見られるヨコハケの状況や黒斑状のくすみなどがうかがえることなどから、埴輪の時期を5世紀前半と判断したことを紹介した。

(註6) より詳細な年代観については、発掘資料の大形破片によるB種ヨコハケの細分をまっけて検討したい。

(註7) 牡丹山古墳の円筒埴輪基部基底面の乾燥方法を示す圧痕では、木の枝などの木本植物や草本植物の痕跡がうかがえるものの他に、平行する刷毛目状の痕跡がみられるものがある。同様な例は福井県越前地域のものの中に認められる。重立山1号墳のものと免鳥長山古墳(5号墳)のものの中にある。これは一見すると刷毛目に見えるが、柁目板の敷板の圧痕ともみられる。このような類例を管見にして知らないが、もしも限られた例ならば、他の様相も加味して類似する要素が多い場合、両地域の繋がりを物語るものとなろう。

〈参考文献〉

- 浅野良治2008「北陸における埴輪をもつ古墳」『古代文化』59-4:146-154, 古代学協会
- 東 航平2013「測量調査に参加して」『花園大学考古学研究室だより』vol.64:3
- 一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要』V
- 一瀬和夫2005『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館
- 太田博之1999「関東中期の様相」『埴輪が語る科野のクニ』:143-172, 更埴市森將軍塚古墳館
- 風間栄一1999「長野県の様相」『埴輪が語る科野のクニ』:65-96, 更埴市森將軍塚古墳館
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』:64-2:1-70, 日本考古学会
- 菊地芳朗2012「第3章まとめⅡ 古墳時代における大師森石棺・菱津石棺のもつ意義」『東北南部における古墳時代石棺の調査1』:55-59, 福島大学行政政策学類・福島大学行政政策学類考古学研究室
- 木村恬文2011「我が師・金塚友之丞先生」『ほくえつ』19号:15, 北越高等学校同窓会だより
- 金塚友之丞1956「六字山その他の土器」『高志路』170:32 新潟県民俗学会
- 黒埼町2002『黒埼町史通史編』
- 小林隆幸2013「『牡丹山』と注記された埴輪片」『帆檣成林』vol.28:6-7, 新潟市歴史博物館
- 田邊朋宏編2007『免鳥古墳群範囲確認調査報告書』福井市文化財保護センター
- 永江寿夫2008「若狭地方の出土埴輪について」『古代文化』59-4:134-145, 古代学協会
- 中司照世編1997『若狭地方主要前方後円墳総合調査報告書』福井県教育委員会
- 新潟県1977『新潟県地質図』
- 新潟市教育委員会2004『新潟市山木戸遺跡マンション等建設予定地内発掘調査報告書』
- 新潟日報社2013『新潟日報』2013年8月9日朝刊
- 日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会2013『文化の十字路口 信州』2013年度長野大会研究発表資料集
- 橋本博文1996「太田天神山古墳」『古墳への旅』:93-95, 朝日新聞社

橋本博文1998「5 飯綱山10号墳1996年度の調査のまとめと今後の課題」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』1：78-94 新潟大学人文学部

藤沢 敦1999「東北の様相」『埴輪が語る科野のクニ』：173-190, 更埴市森將軍塚古墳館

宮崎 認2013「埴輪」『若狭と越の古墳時代』季刊考古学・別冊19：87-94, 雄山閣

山田俊輔2011「毛野の埴輪」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17：115-119, 雄山閣